



校長室だより

令和8年度
10月9日
NO. 22

昔から続く自然との共存。収穫の喜びを味わった米作り。

「だったら必ず起きる『想定外』『偶然』の存在をまず意識し、想定外がもたらす心のマグマの変動を『活きた時間』として楽しんでみる」

『想定外を楽しむ』（幻冬舎） 鎌田浩毅著



秦梨の秋風景。天気にも恵まれた昔からの営み。誰もが自分の手で稲を刈りました。

降り続いた長雨の後の秋空は、青く突き抜けているように見えます。数日前には、真上に立ち上った飛行機雲が、青空のキヤンパスをいっぱい抜けていくのを見ました。青空がより気分を晴らしてくれるのは、空をふさいでいた曇り空による心の雲まで、取り払ってくれるからだと感じられます。

二日に行われた稲刈りは、まさに秦梨の原風景を思い起こさせてくれました。吹き抜ける秋風、のどかにとび回る赤とんぼ、黄金に輝く稲穂、鎌を持つ大人に子供、きれいに刈り取られた切り株、刈り取った稲穂を運ぶ子供たち……。きつと何十年前にも、同じような景色が広がっていたのだと想像されます。長雨で長らく外にも出られない日が続いたこともあり、青空のもと、子供たちはより収穫の喜びを感じられたことでしょう。五、六年生はさすが、手つきもスムーズで、そこだけみるみる稲が刈られていきます。低・中学生は顔つきも真剣に、慎重にザックザクと刈っていきます。自分の順番を待つ間、虫たちに目をやる子供たちの姿も、昔と変わらないのではないのでしょうか。

「稲刈りはほんとに晴れてないといけない」と畔柳さんは言います。これも昔から変わることのない営みだと言えます。天気予報もない時代であればなおさら、このような青空は尊く、米作りがまさに自然の営みの中で行われてきたと言えます。

こうした今も昔も天候に左右される米作りは、いわば自然という偶然の中で行われる人間の営みになります。現在、言われる「コメ問題」も、結局は自然が引き起こす問題です。その偶然を少なくしようと科学技術は進化しましたが、それでも、人の手が及ばない自然の営みの中に身を置くことは、自然に親しむこと、自然の中で生きることでもあるのだと感じます。

【10/7のさえずりさん読み聞かせ本】1, 2年生「わっしょい わっしょい ぶんぶんぶん」(かこさとし文・絵)、「どうぶつ まぜこぜ あそび」(サトシン作)、「ばけ ばけ ばけ ばけ ばけ たくん」(岩田明子文・絵)、3, 4年生「ぐんぐんどうやどや ざっそうぐんだん」(まついつばさ作・絵)、「いもさいばん」(きむらゆういち文)、「もみじのてがみ」(きくちちき作・絵)、5, 6年「むしむしかぼちゃだいさくせん」(古川裕子作)、「わたし」(谷川俊太郎文・長新太絵)、「ちいさな つきがらす」(マーカス・フィスター作)